

## リンゴの日焼け果発生軽減技術

近年、温暖化の影響により猛暑や残暑の厳しい年が増え、リンゴでは日焼け果の発生が問題となっています(図1)。日焼け果の発生防止には、果実の表面温度の上昇を抑えることが有効とされています。そこで石川県農林総合研究センター農業試験場では、果実への資材の被覆による日焼け果の発生軽減技術を開発しましたので紹介します。



図1 日焼け果

### ☆ 技術の概要

1. リンゴ「秋星」で行った試験では、カサ状散光性資材およびカンキツ用果実袋の果実への被覆は、いずれも果実表面温度の上昇を最大で約7℃抑えて、日焼け果の発生軽減に有効であり(図2、3、4)、着色や果実品質にも影響を与えません。
2. いずれの資材も気温と日射量が上昇し日焼け果が発生する前の7月上旬に被覆を行い、カサ状散光性資材では9月上旬に、カンキツ用果実袋では8月上旬に除去することで、日焼け果と被覆によるサビ果の発生が最小となり、秀品果の割合が高まります。



カサ状散光性資材



カンキツ用果実袋



無処理

図2 資材の果実への被覆(7月上旬)

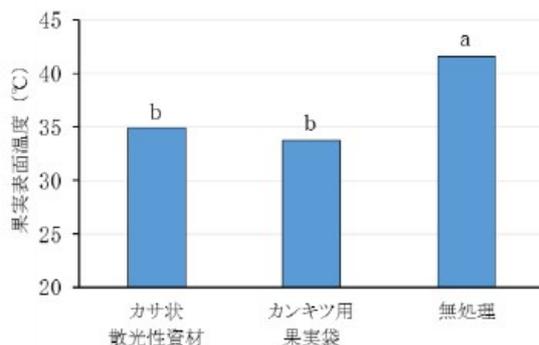


図3 果実表面温度(晴天日 8/24 13時)

※異なる英文字間に有意差あり

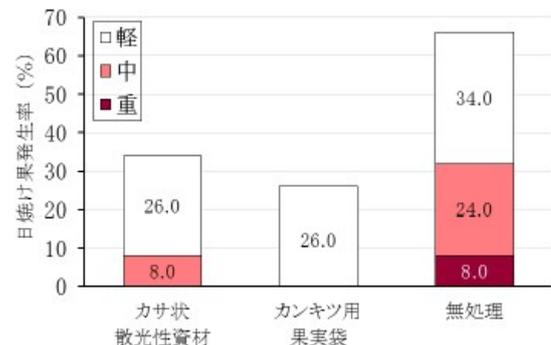


図4 日焼け程度別割合

### ☆ 活用面での留意点

1. 資材の被覆は、樹の南側半分に着果した、葉が少なく露出した果実のみで構いません。
2. カサ状散光性資材(サンチル、能任七社製)は1枚25円程度、カンキツ用果実袋(サンテ、東洋殖産社製)は1枚15円程度で販売されており、いずれも3年以上使用できます。
3. 詳細については、石川県農林総合研究センター農業試験場育種栽培研究部園芸栽培グループ(076-257-6911)までお問い合わせ下さい。

(農研機構果樹茶業部門 企画管理部 果樹連携調整役 和田 雅人)